慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	自己表象と集団的記憶喪失： 転換期を迎えた国立アメリカインディアン博物館
Sub Title	Self-representation and collective amnesia : the National Museum of the American Indian in transition
Author	鈴木, 透(Suzuki, Toru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2016
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.137 (2016. 2) ,p.55- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000137-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自己表象と集団的記憶喪失
――転換期を迎えた国立アメリカインディアン博物館――

鈴　木　　透

1　はじめに

1990 年代以降のこの四半世紀，公共の場におけるアメリカ先住民の記憶と表象をめぐっては，二つの大きな事件があった。一つは，1991 年に連邦議会がカスター古戦場のリトルビッグホーン古戦場への名称変更とインディアン・メモリアルの建立を決定し，2003 年にそれが完成したこと，もう一つは 2004 年 9 月に首都ワシントンのモールにスミソニアン博物館群の一つとして国立アメリカインディアン博物館（National Museum of the American Indian，以下 NMAI と表記）が開館したことである。これらの出来事は，非 WASP 多数派時代が秒読みに入りつつある中，社会の分断化傾向を十分収拾できずにいる現代アメリカ社会において，絶対多数派なき時代にも通用する価値観の構築に向けた模索が始まっていることを示唆している。先住民側の記憶を抑圧し，ステレオタイプ化された表象へと先住民を貶めてきた従来のアメリカ社会の姿勢には，一定の変化が見られるといえる。

筆者は，公共の場における記憶表現の変化からアメリカ社会の動向を分析する作業を続けてきた[1)]。特にカスター古戦場の名称変更とインディアン・メモリアルの建立については，不確かな神話による白人側の歴史観を絶対化するような「国家の公式の記憶装置」のあり方を見直し，アメリカ社会がこれまで目を背けようとしてきた恥ずべき過去の記憶や，歴史の陰に追いやられてきた弱者の側の記憶を国が積極的に回収していく方向性に大きな弾みをつける象徴的事件となった点で，特筆すべき事例であることをこれまでも指摘してきた。実際，これ以降，先住インディアンのみならず，様々な民族集団や女性に関連し

た新たな史跡が国立公園局の手で設置されてきている。そこでは，第二次世界大戦中の日系人の強制収容所の跡地や，公民権運動時代の人種隔離が行われていた学校の建物など，比較的最近の歴史的事件にまで史跡保存の対象が及んできており，古さや珍しさという価値基準ではなく，「アメリカの過去の過ちであれば，時代を問わず，その記憶を次世代に継承していくべきだ」という発想が強化されてきているといえる[2)]。また，アメリカの発展に貢献していながら，その役割が十分評価されてこなかったような集団の過去に目を向け，それらの集団の置かれてきた立場を改めて想起させるような記憶装置の開発が，国立公園局の文化財行政の中で重要な位置を占めるようになってきているといえる[3)]。

一方の NMAI は，それまでのアメリカの博物館における先住インディアンの扱い方が様々な問題点を含んでいたことからすれば，先住民自身の声を公共空間に届けるという新たな流れを作り出した存在といえるが，その展示方法や展示内容をめぐっては開館当初から賛否両論が飛び交い，昨今の国立公園局の史跡保存の方向性に比べると，過去のアメリカの恥部を直視しようとする姿勢が抑制的であるという声が少なからず寄せられてきた。ところが，開館から 10 年を経過するに及んで NMAI は，開館当初の常設展示を 2014 年 1 月から順次 2019 年までに別の展示に切り替える方向へと転換し，2014 年秋には，期間限定ながら，“Nation to Nation”と題して，合衆国政府と先住インディアン諸部族との間に結ばれた条約を再検証する展示を新たにスタートさせた。これら一連の条約は，合衆国が先住インディアンの共同体をあたかも外国とみなして外交条約というべきものを結んできたこと，その締結の経緯がずさんで内容にも多くの問題点があったこと，そして，それらの条約で認められた先住インディアンの権利が必ずしも守られてきていないこと等，先住インディアンと合衆国との不平等な関係を再認識し，リザベーションという中途半端な国家内国家の地位を現在でもあてがわれている先住インディアンの立場を改めて浮き彫りにするには格好の題材である。政治的にデリケートな問題を含むようなテーマを真正面から取り上げることには慎重であったきらいのある NMAI の従来の姿勢からすると，開館当初の常設展の撤去とこの新たな展示の開始は，抑圧さ

れた記憶の復権や先住民の再表象のみならず，アメリカという国家の責任やこの国の国家体制そのものが持つ曖昧さという，従来の展示では封印されがちであった政治的論点をも前景化する画期的なものである。

開館以来の常設展の終了に伴う新たな展示の登場は，現在 NMAI が開館以来の最も大きな転換期を迎えていることを意味している。この展示の成否は，この博物館の今後のみならず，国家と記憶や表象をめぐる問題に博物館がどう関わっていくべきかという点で，今後のアメリカにおけるパブリック・メモリーの動向にも少なからぬ影響を与える可能性を秘めている。小論の目的は，NMAI という記憶装置のこれまでの歩みを検証しつつ，その現状と射程を考察することである。ここではまず，NMAI の設立の経緯を改めて振り返り，この博物館が様々な制約の上に成立していることについて言及する。次に，そのような制約にもかかわらず，NMAI がどのような新たなコンセプトを打ち出そうとしてきたのか，さらにはそれが開館当初の常設展示にどのように結実したのかを整理する。そして，そうしたコンセプトに対する賛否両論がいまだにくすぶる中での常設展の終了と新たな展示の導入が，従来の NMAI の路線とどう関係づけられるべきなのか検討し，それが現代アメリカにおけるパブリック・メモリーの再構築という文脈においてどのような可能性や課題を提起しているのか考察したい。

2　NMAI 設立の経緯

NMAI の建設は，1989 年に連邦議会で決定された。これを定めたパブリック・ロウ 101−185 では，ニューヨークのハイ財団所有の先住民関係の資料をスミソニアン協会に譲渡し，ニューヨークのマンハッタン南部にその一部を展示するスペースを新たに作る（1994 年完成）とともに，収蔵庫を新たにメリーランド州に建設（1999 年完成）し，アメリカ先住民の歴史と芸術文化を専門とする国立博物館をスミソニアン協会管轄の下に首都ワシントンのモールに建設することが記載された。遅きに失したとはいえ，ようやく先住民の歴史と文化の重要性を国が公式に認知したことを象徴する博物館が国家プロジェクトとし

て建設されることになったのである。

NMAI の基となったコレクションは，収集家のジョージ・ギュスタヴ・ハイが 1957 年に死去した際に残したものである。資産家の家に生まれ，大学卒業後に技術者としてアリゾナ州で橋の建設に従事した際に先住民の文化に魅せられた彼は，相続した莫大な遺産を利用して先住民関連の品々を次々に買いあさり，各地に調査隊を派遣して，80 万点に上る物的資料と 10 万枚に及ぶ写真を含む膨大なコレクションを築いた。これは，個人による先住民関連資料のコレクションとしては世界最大といわれている。この中には，極北地方から南米大陸に至るまでの様々な部族に関する資料が含まれ，時代的にも考古学的な遺物から現代の日用品に至る幅広いジャンルのものが含まれているが，その規模があまりに膨大なために，彼のコレクションの展示はおろか，収蔵さえもが懸案となっていた。それゆえ，ハイ財団は，1970 年代以降，収蔵品の維持管理のために次第に財政危機に陥るようになり，収蔵品を手放すことを検討し始めた。しかし，これだけの膨大なコレクションの維持管理を任せられそうな規模や技術，管理能力や資金を備えた機関は，非常に限られていた。その意味では，スミソニアン協会との交渉という選択は極めて現実的だったといえる。ところが，スミソニアン協会への収蔵品の譲渡とそれを展示するための新たなスミソニアン博物館の建設をめぐる交渉は，1987 年に本格化したものの，紆余曲折の連続だった。これには，ハイ財団側の問題点やスミソニアン協会側の事情だけでなく，先住インディアンをめぐる社会状況の変化が複雑に絡み合っていた。

ハイ財団側が抱えていた問題としては，ハイ自身が必ずしも学者ではなかったこともあって，収蔵品の選定，さらにはタグやカタログの作成方法に必ずしも一貫性がなく，収蔵品を引き継ぐ側の維持管理に支障をきたす可能性があった点が挙げられる。しかし，それ以上に交渉に大きな影響を与えたのは，スミソニアン協会側内部の思惑だった。とりわけこの交渉に難色を示したのは，スミソニアン協会の人類学部門であった。人類学部門が深く関与している国立自然史博物館は，すでに先住インディアンのみならず，世界の諸民族に関する文化人類学的収蔵品を数多く有していたが，そこに収まりきらないコレクション

を引き継ぐことは必ずしも人類学部門の意に沿うものではなかった。というのは，人類学部門には，将来的には国立自然史博物館から独立した人類博物館を作りたいという思惑があったからである。ハイ財団からの申し出によって収蔵品自体が大幅に増強されるとはいえ，その中で南北アメリカ大陸の先住民の資料だけが突出するとなると，自然史博物館も人類博物館ももてあましてしまうのは避けられない。仮に新たな博物館を作るとすれば，先住インディアンに特化した博物館となる可能性が高いのは誰の目にも明らかだった。多様な民族集団を展示対象とした人類博物館を志向する人類学部門の立場からすると，特定の民族集団のみを特権化するような博物館には抵抗があった。そして，ひとたび特定の民族を主題とする博物館が出現してしまえば，人類全体を包括的に展示するような人類博物館の構想そのものが立ち消えになってしまう可能性が高かった[4)]。

こうした「博物館のバルカン化」に対する危機感には一定の説得力があった。民族ごとの博物館をスミソニアンの予算で運営するのは非現実的であったし，それは結果的にどれか特定の集団を特別扱いすることになりかねない。しかし，人類全体を対象とする人類博物館の構想が押し切られた背景には，従来の先住インディアン展示に対する先住インディアン側からの抗議がもはや無視できないものになっていたことが深く関係していた。

伝統的にアメリカの博物館では，先住インディアンはごく限られた場所でしか展示対象として扱われてこなかった。その代表的な場所は，自然史博物館と歴史博物館であった。自然史博物館は，地球環境史をテーマとした，生物学，地質学，気象学等の自然科学分野を中心とする博物館だが，動物のみならず人類も自然環境にどのように適応してきたかという観点から，文化人類学的な展示内容をも扱ってきた。しかし，そこでの「ヒト」の扱い方は，文明世界の外としての自然界にその民族がどう適応してきたかという眼差しに基づいていた。それゆえ，自然史博物館では，アザラシなどの極北地方の動物の剝製の隣にイヌイットの生活様式が展示されるといったことがよく起こる。先住インディアンの場合も同様で，白人入植以前のアメリカ大陸の自然環境と関連させながら，その生業や習慣を紹介するというコンセプトが強い。そこには，自然と

ともに暮らす人々への畏敬の念がないわけではないが，そうした人々をあたかも自然界の一部の存在であるかのような，文明世界とは異質の他者として表象しようとする傾向も否めない。自然史博物館では，西洋文明世界が直接展示対象となることは稀であるという事実をも踏まえるならば，西洋文明世界からは隔離され，動物たちと一緒の世界に展示されるという展示方法自体が，先住インディアンにとっては屈辱的であった。

また，歴史博物館における先住インディアンの扱い方にも偏りがあった。地域の歴史博物館の中には，先住インディアンに関する展示を設けているところが少なくないが，たいていの場合，それは白人入植以前の時代に関する部分に限られ，開拓以後の歴史の展示内容からは先住インディアンは除外されている。つまり，歴史博物館においては，有史以前の過去の人々であるかのように先住インディアンは扱われてきたのである。

ハイ財団の収蔵品のスミソニアン協会への譲渡の話し合いが行われていた 1980 年代末は，こうした従来の博物館展示のあり方に対する先住インディアン側からの抗議がすでに高まっていた時期だった。1960 年代の公民権運動の成功に触発される形で勢いを増したいわゆるレッドパワーの運動は，AIM をはじめとする先住インディアンの権利回復や地位向上を求める政治運動の盛り上がりとともに，1970 年代には次第に先鋭化していった。ウーンデッド・ニーの占拠事件（1973）やカスター古戦場での抗議活動（1976）等の実力行使の背景には，独立二百年の節目を迎えながらも先住インディアンの存在自体を忘れたかのように無視し続けるアメリカ社会の目を，自分たちに今一度向けさせたいという思いがあったといえる。そして，1980 年代の教育界に大きな影響を与えた多文化主義は，マイノリティの表象をめぐってアメリカ社会により敏感になることを求めるものであり，先住インディアンたちが自然史博物館や歴史博物館における表象を問題化していく際の追い風となった。先住インディアンたちの抗議運動は，政治闘争から文化戦争という局面へと拡大しつつあったのである。

こうして，アメリカの博物館における先住インディアンの表象が問題視されるようになっていたところに，新たな先住民博物館を作れるだけの規模のコレ

クションがスミソニアン協会に譲渡されようとしていた。このような巡り合わせでは，現実的には最も有力な譲渡先だったはずの国立自然史博物館が強い発言権を行使するのは困難だった。アメリカの自然史博物館自体が先住インディアンの表象の歪曲に加担してきたのではないかという批判の前では，新たな博物館の構想に国立自然史博物館が主導権を握れる可能性は低かった。かといって，ハイのコレクションの譲渡そのものをスミソニアンが拒むとなれば，それは先住民軽視と受け取られ，問題がさらにこじれるのは必至だった。結局のところスミソニアン協会としては，ハイのコレクションを有効活用して先住インディアンのための新たな博物館を作るという選択肢に合意する以外になかったのである。

この結果，国立のインディアン博物館を新たにワシントンのスミソニアン博物館群の一つとして建設するという構想を推進するにあたっては，従来型の先住インディアン展示と一線を画すことが至上命題となった。それには，白人側からの眼差しによって「他者」として表象されることのないよう，先住インディアン自身が自らの手で展示内容を決定する必要があった。実際，NMAI 設立の準備は，シャイアン族の血を引く先住民問題の活動家リチャード・ウェストを中心に，先住民の部族の代表者との協議を重ねながら進められた。また，建築家ダグラス・カーディナルを中心に設計された博物館の外観は，風や水によって浸食された西部の岩肌を連想させるものとなり，敷地内には白人入植以前のアメリカ大陸の植生を示す植物が植えられた。“Return to a Native Place”というコンセプトの下にまとめられたこれらの外観は，ギリシア・ローマを彷彿させる西洋建築を基調としたワシントンの公共建築群の中で異彩を放つ存在となり，長らくこの国が忘れかけていた人々の存在を改めて強烈に思い起こさせるものとなった[5)]。だが，2004 年の新たな博物館の開館は，先住インディアンをめぐる博物館展示のあり方に決着を見るどころか，新たな論争の始まりともなったのである。

3　NMAI の開館当初の展示内容と基本コンセプト

先住インディアンをめぐる従来型の博物館展示と一線を画すという NMAI の挑戦が，なぜ新たな論争の火種となったのか。この点を理解するためには，開館当初のこの博物館の展示内容と基本コンセプトがどうだったのかをまず整理する必要がある。

開館した博物館の内部は，まず一階部分にポトマックと名づけられた大きなロトンダのスペースがあり，先住民と水との関わりを感じさせる展示物が配置された憩いの場が作られた。その奥には，“Who We Are”という先住民たちの現代の生活を紹介したオリエンテーション・フィルムのシアターがあり，実際の展示室は二階以上の部分に作られた。展示スペースは，大きく分けると，“Our Peoples”，“Our Universe”，“Our Lives”，“Window on Collections”の四つの部分に分かれていた。このうち最後の“Window on Collections”は，ハイ財団から譲り受けた膨大な収蔵品の一部を紹介するスペースとして用意されているものなので，一定のテーマ性に沿った常設展示は，残り三つの部分ということになる。

このうち，まず“Our Peoples”は，“Giving Voice to Our Histories”と“History of Resilience”の二つのゾーンから構成されていた。前者では，セミノール，カイオワなどアメリカの部族からメキシコやブラジルに至る 8 つの部族が取り上げられ，それぞれの部族の視点で自分たちの歴史が紹介された。また，後者では，白人の入植以来先住民が様々な影響を受けながらも，新しい環境の中を生き抜いてきた様子を物語る事物，例えば，銃や諸部族の言葉で書かれた聖書などが展示された。

次の“Our Universe”の部分は，先祖代々の知恵を先住民たちがどのように受け継いでいるのかを，ラコタやサンタクララなどのアメリカの部族のコミュニティだけでなく，アラスカからペルー，チリに至る 8 つのコミュニティを通して紹介したものである。このゾーンは，とりわけ先住民たちの宇宙観に重点が置かれた内容になっていた。

一方，“Our Lives”は，“Contemporary Life and Identities”という副題がつけら

れた，現代の先住民たちの暮らしぶりを紹介するエリアで，シカゴの都市生活者からカナダの寒冷地に至るまで，異なる自然環境で様々な生業を営む 8 つの先住民コミュニティを紹介していた。このほか，NMAI は，展示以外にも様々なプログラムの企画運営にも力を入れ，先住民のスタッフを配置して来館者との交流を図るシステムを導入しただけでなく，先住民関連の映画の上映やアートの展示も頻繁に実施してきている。また，先住民たちの部族博物館への支援も積極的に行っており，NMAI は，先住民との交流の場としての性格のみならず，文化や芸術の紹介や振興のためのカルチュラル・センターのような機能を果たしてきている。

以上が NMAI の開館当初の常設展示と博物館機能の概要であるが，そこには，この博物館の展示方法を貫く二つの重要なキー・コンセプトが認められる。一つは，いわゆる“community-curator”システムの導入，もう一つは“survivance”という survive と advance から成る造語で表されたナラティヴ・テーマである。

コミュニティ・キュレイターのシステムとは，展示品の解説を博物館の学芸員ではなく，先住民コミュニティの住人の手に委ねるという手法のことである。開館当初，この博物館では，合計 24 の先住民コミュニティに焦点を当てた展示がなされていたのだが，各コミュニティの住人によって記された解説パネルが展示されており，プロの学芸員ではなく，先住民自身に自分たちのことを語らせようとする手法がとられている。いわば，三人称による外側からの客観的叙述から，一人称による共同体内部からの主観的な発言への転換が図られたのである。こうした手法は，先住民と密接な連携を築きながら彼らの声を公衆に届ける場としてこの博物館が構想されていたことを意味している。

一方，“survivance”とは，館内の展示文によれば「生存以上のもの，伝統を受け継ぎつつも変容し前進する先住民たちの姿」を意味していた。つまり，命からがら苦難を乗り越えたという観点ではなく，現在も生き続ける先住民の姿が体現する活力こそが，重要なテーマだというのである。このことは，この博物館が“living museum”という表現を好む点とも符合する。かねてからウェストが，「この博物館は先住民版のホロコースト・メモリアルにはしない」と再

三発言してきているのも，過去の先住民の追悼よりも，今まさに力強く生き続けている先住民の紹介に NMAI が重心を置こうとしていた様子を表している。

こうした開館当初の常設展示や基本コンセプトには，先住インディアンをめぐる従来型の博物館展示への反動が色濃く反映されている。まず，常設展示にいずれも“our”という言葉が挿入されている事実は，先住インディアンがこれまで「彼ら＝白人」の目から表象されてきた経緯を告発しつつ，客体としてではなく，主体として自らを語る権利を先住インディアンが回復したことを象徴している。このことは，白人の視線からではなく，自分たちの声で自分たちのことを語るという，コミュニティ・キュレイターの活用とも符合する。また，過去の先住インディアンよりも，苦難の歴史をくぐり抜けていまだに存在している先住インディアンの姿を強調したいという博物館側の意向も，先住インディアンを白人入植以前の時代に関する展示に押し込めてきた，アメリカの歴史博物館に対するアンチテーゼを体現しているといえる。

さらに，この博物館が「国立」という名称にもかかわらず，アメリカという国家の枠に必ずしも縛られていない点も注目に値する。実際，この博物館では，“Native American”という通例アメリカ合衆国内の先住民を指す呼称の代わりに“American Indian”という表記を用い，開館当初の展示でも，カナダからカリブ海，南米に至るまで，南北アメリカ大陸の先住民全体を“American Indian”とみなし，現在の国境とは関係なく，先住インディアンの世界がかつては南北アメリカ全体に広がっていたことを暗示する展示方法が導入された。これは，国境線で囲まれた国家という単位で歴史を切り取ることの限界を暗示しつつ，先住民の世界にはそれ以前からの営みがあり，その理解には近代国家という枠組みとは異なる物差しが必要であることを来館者に伝える役割を果たしている。

これら一連のコンセプトは，先住インディアンをめぐるアメリカの従来型の博物館展示に対するオルタナティヴとなるモデルを NMAI が開館の時点で一定程度提示できたことを物語っているといえよう。しかし，同時に見落とせないのは，確かに展示内容に先住民が主体的に関わることができたとはいえ，この博物館は，先住民が必ずしも自由に運営できる存在ではないという点であ

る。

第一に，この博物館はスミソニアン協会という連邦政府から財政援助を受けた組織の一部であり，アメリカという国家の立場を考慮せざるを得ない事情がある。とりわけ，1995 年にスミソニアン航空宇宙博物館が企画した原爆展が中止に追い込まれて以降は，スミソニアン側も国を代表する博物館という自分たちの位置づけに敏感にならざるを得なくなっている。国家に対して批判的，ないし敵対的なメッセージを発信しようとする際の自由度に制約がないとはいえない。もっとも，同様の問題は，内務省の管轄下にある国立公園局も抱えているわけだが，国立公園局の場合は，歴史遺産や自然遺産の保全と公開が主たる任務であり，国家にとって不都合な過去であったとしても，それを歴史的事実と認定することさえできれば，重要な教訓として共有財産化して後世に伝えるために史跡化することへの理解は比較的得やすい立場にある。しかし，NMAI の場合，先住インディアン自身の私的な声が公共空間に招き入れられているわけで，その内容に国家への敵対的メッセージが混じるとなると，連邦の予算で国家に敵対的内容の発言を個人に許した上に，それが国立博物館によって認められた国家の公式見解であるかのような誤解を与える可能性があるという批判が当然起こり得る。アメリカという国家から認知されることは先住インディアンの悲願であったとはいえ，スミソニアンの一部という立場は，先住民側の本音を余すところなく解放できる場というわけでは必ずしもないのである。

NMAI が当初から抱えることになったもう一つの制約は，博物館の大黒柱となる展示品をハイのコレクションに依存しなければならないという点である。確かにハイは比類のないコレクションを築いたが，そこには消えゆくインディアンの文物の物珍しさに魅了された白人側のエキゾチシズムの視線が潜んでいる。つまり，この博物館の展示の土台は，必ずしも先住民の意思とは無関係に，かつ先住民たちの習慣に必ずしも十分な敬意を払うことなく，宗教関連の道具も含めて根こそぎ先住民の村で買い付けられたような品々である場合が少なくないにもかかわらず，それらを利用して先住民が自らの声を語るという皮肉な構造を抱えて NMAI は出発したのである。先住民が自ら選んだ「モノ」

と先住民自身の声の組み合わせであれば，先住民側の主張を展示に反映させるのは困難ではない。しかし，自分たちの声を届けるための媒体が他者のエキゾチシズムの視線の産物であるとすれば，それはこの博物館が発信しようとするメッセージに根本的な亀裂を生じさせかねない。

もっとも，こうした皮肉な事態は，先住インディアンの文化復興を取り巻いている状況一般と決して無縁ではない。先住インディアンの場合，武力制圧され，強制移住させられた上に，同化政策によって伝統文化の継承を困難にさせられてしまったという経緯がある。19 世紀後半に各地で導入されたインディアン・スクールは，先住民の子供たちをリザベーションの親元から引き離し，寄宿生活の下，英語教育と実務教育を施し，西洋的価値観をすりこもうとするものだった。これによって世代間の言語継承に大きな支障が生じ，文字記録ではなく口頭伝承によって先祖の知恵を次世代に伝えてきた先住インディアンの伝統文化は大きな危機に直面した。20 世紀初頭にかけて，ハイをはじめとする先住民関係の文物のコレクターたちが活躍したのも，また，崩壊しつつある未開の文化を記録しようと文化人類学が発展したのも，こうした先住民の文化継承の危機を目の当たりにしてのことだった。だが，コレクターにしても，文化人類学者にしても，白人の視点で先住民の生活や儀式を記録するという限界があった。こうして，先住民内部での文化継承が困難となる中，白人側が保存したモノやテクストは，皮肉にもその後の先住民の文化復興の重要なリソースとなっていく。部族の伝統文化を先住民自身が継承しにくい環境に追い込まれていった結果，先住民の文化復興は白人側の勝手な解釈や誤解の可能性を排除できないような遺産に依拠せざるを得ないという状況は，実際には NMAI のみならず，先住インディアン諸部族全体が多かれ少なかれ直面している問題でもあるのである。

このように考えてみると，確かに開館当初，この博物館は先住民展示の新機軸を打ち出した観があるものの，その背後には無視できない問題点も潜んでいたといえる。その点，コミュニティ・キュレイターを採用し“survivance”のナラティヴ・テーマを強調するという路線には，来館者の目を展示方法の斬新さにひきつけ，NMAI を取り巻く制約や矛盾を目立たないようにする効果も期

待されていたのかもしれない。とはいえ，開館直後からこの博物館の展示内容をめぐって論争が巻き起こったことは，従来型とは一線を画す新たな展示モデルの限界も暗示する。と同時にNMAIを取り巻く制約や矛盾は，単にこの博物館固有の問題という次元を超えて，国家と博物館展示との関係や，先住民の文化復興はどうあるべきかという，より大きな文脈とも連動しているのであり，開館当初の展示をNMAIが今後どのように刷新していくのかは，単に先住民表象のあり方に留まることなく，現代アメリカにおけるパブリック・メモリーの今後の動向にも大きな影響を与える可能性を秘めている。そこで次に，これらの点を視野に入れつつ，NMAIの登場が提起した論争の核心とは何だったのかへと議論を進めたい。

4　開館直後のNMAIに対する評価

NMAIをめぐっては，2004年の開館直後から新聞各紙が様々な論評を掲載したのを皮切りに，博物館学や先住民関連の研究者，先住インディアンたちをも巻き込んだ論争に発展していった。この博物館がもたらした反響の大きさは，学術専門誌が開館直後からこの博物館の問題を取り上げたことにも表れている。一博物館が学会誌上に論争を巻き起こすという，非常に珍しい状況が出現したのである。中でも，*Public Historian*誌は，2006年の春季号で，NMAIに関する特集を組み，5人の論者の論考とそれらに対する博物館側からの反論を約50ページを割いて掲載した。この特集号は，NMAIの当初の展示に対する評価をめぐっては，質・量ともに最も充実している。しかし，論争はその後も続き，2008年には，NMAIをめぐる論争がネブラスカ大学出版局からアンソロジーとして出版されるという異例の事態にも発展した。そこで，以下，この特集号やアンソロジーに掲載された論考を踏まえつつ，NMAIの打ち出したコンセプトに対する評価を整理してみたい[6)]。

エイミー・ローントリーによれば，NMAIに対する当初の反応は，およそ三つのパターンに分けられる。一つ目は，ジャーナリストに多いもので，専門的知識を持つ学芸員よりもコミュニティのいわば素人による記述が優先されてい

ることを批判する論調，二つ目は，学者に多いもので，先住民の観点が活かされていることを逆に評価する論調，三つ目は，開館を好意的に受け止めつつも，未解決の課題が多いことを指摘するもので，基本的には，最後の三番目のタイプの評価が当初の段階では大勢を占めていたといえる。しかも，課題として指摘されている事柄は，多岐にわたっていた[7)]。

例えば，80 万点にも及ぶ所蔵品の内，展示品がまだごく一部にすぎないことから，より多くの展示物を求める声があるかと思えば，既に現在の展示でも情報が過剰だという声もあった。また，先住民が自ら語るビデオ・クリップが展示室の随所に存在することをめぐっても，評価が分かれた。先住民の生の声が聞けてよいという意見もあれば，それらがかえって収蔵品を陰に追いやっているという批判もあった。また，展示内容全体的に，過去の先住民が味わわされた苦難の歴史に関する記述が薄く，むしろ現在活力ある集団を形成していることが前景化されている点も違和感があるという批判も見られた。

こうした批判に対して，NMAI の統括責任者代理を務めていたダグラス・E・イヴリンとスタッフのマーク・G・ハーシュは，反論を展開している。二人は，博物館側は決して「モノ」の展示を軽視しているわけではないが，より重要なのは「人々」に焦点を当てることであるとし，先住民の物質文化から過ぎ去った時代を描き出すような旧来の博物館の手法を打破する必要性を強調している。また，苦難の歴史が軽視されているという批判に対しては，各コミュニティの視点から語られた歴史展示の中に一定程度盛り込まれているとした上で，より重要なのは現実に先住民が生き続けていることを彼らの言葉で語る機会を提供することであり，こうしたコンセプトには先住民の理解は十分得られていると述べている[8)]。

確かに，従来のアメリカの博物館で先住民がどのように展示されてきたのかを考える時，NMAI の試みは画期的である。自然史博物館においで動植物を観察するような文明世界の側からの視線で表象されてきたような「未開人」としての先住民像や，歴史博物館における白人の入植以前の時代のセクションにしか登場しないような「過去の人々」といった先住民像を一新しようとする努力が払われていることは事実である。また，五大湖地方の野外博物館における先

住民関係のリヴィング・ヒストリー・プログラムを調査したローラ・ピアーズが指摘するように，来館者の大部分が先住民とろくに話した経験もなく，ステレオタイプ化されたイメージに凝り固まっていて，先住民に対して恐ろしいほど無知であるという事実をも鑑みれば[9]，先住民のスタッフを配置し，先住民たちの生の姿と声が響く空間を作り上げようとする努力には，これまでのアメリカの博物館のあり方を刷新しようとする姿勢を見てとることができよう。過去の悲惨な歴史に関する比重が相対的に軽く見えるのは，まさにこうした点を優先した結果でもある。

だが，この博物館に過去の悲惨な歴史に関する展示を期待した人々が失望したという経緯は，この博物館の基本コンセプトをめぐる，博物館側と来館者との間の意識のずれのより深刻な側面をも映し出している。そもそも，この博物館の名称が国立アメリカインディアン博物館であることを考えれば，「人々」が主人公であるというコンセプトは，むしろその名称にふさわしいといえる。しかも，この博物館は，24 の部族やコミュニティを通して，先住民として一くくりにされがちな人々が実際には多様な伝統と暮らしに彩られていることを紹介しようとする。それは，「インディアン」なるカテゴリーが先住民の総称にすぎず，「典型的な」先住インディアンなるものがフィクションにすぎないことを告発する。こうしたある種の脱中心化の考え方は，先住インディアンの本質に対する最終解答のようなものを博物館に求めるような発想とは相容れない。従来の博物館が「インディアン＝未開人」ないし「インディアン＝過去の人々」という答えを用意していたとすれば，NMAI は何らかのステレオタイプ自体を封印したのである。したがって，従来の先住民展示に慣れ親しんできた来館者の NMAI に対する不満や違和感の核心にあるのは，未開人でも過去の人々でもないのなら先住インディアンとは何者かという問いに対する明快な解答がはぐらかされ，この集団を単一のナラティヴに押し込めることができるようなリニアーな歴史観に基づく準拠枠が提示されていないことに対する戸惑いだといえよう。当初の常設展示をめぐって白熱した論争は，先住インディアンというカテゴリーを自明のものとみなし，彼らがたどった歴史を単一のナラティヴに還元しようとする白人側の欲望こそが，先住民にとっての大きな障害物

であることをいみじくも明らかにしたのである。

一方，現代アメリカにおけるパブリック・メモリーの再構築をめぐる動向に照らしてみると，NMAI の船出はどう評価できるのだろうか。ベトナム戦没者追悼記念碑から，ホロコースト・メモリアルを経て，エノラ・ゲイ，さらにはテロ事件にまつわる記憶表現へと連なる昨今のアメリカの公共空間における記憶表現の系譜には，ある傾向を認めることができる。それは，多文化主義の台頭と暴力の犠牲者に対する追悼を契機として，公共空間に誘導されたマージナルな記憶が公式の歴史をおびやかし，記憶の収集から参加型の記憶装置の開発へと，いわば記憶の民主化というべき傾向が強化されながらも，それが愛国主義に侵食されやすいことをも露呈させてきた軌跡であるといえる。この点に関しては，筆者は『記憶を紡ぐアメリカ』で論じたのでここでは詳述しないが，NMAI は，こうした流れと接点を持ちつつも，やや趣を異にする部分を持っているといえる。先住民の参加を呼びかけ，マージナルな記憶を回収しつつも，決して過去の犠牲者の追悼は前面に出さず，一方，先住民の復元力という，アメリカという国家の求心力の強化に通ずる要素をはらみながらも，アメリカ以外の部族の展示にも力を入れることで，アメリカ一国のための愛国主義に絡め取られるのを避けているところも見られるからである。

以上のように考えてみると，NMAI が当初導入した常設展示のコンセプトは，この博物館を取り巻く制約や矛盾と真正面から向かい合ったものとはいいがたいとはいえ，従来型の先住インディアン表象の問題点を克服し，記憶の民主化に潜む罠を巧みに回避しようとしていた点では，評価できる。その意図が必ずしも来館者に伝わらなかったことが様々な論争に拍車をかけてしまったわけだが，その原因は，この常設展示のコンセプトそのものにあったというよりかは，むしろそうした誤解が生じるほどに先住インディアンという存在に対する認識のずれが来館者と先住インディアン側との間にそもそも存在していたこと自体に起因しているように思える。一連の騒動は，新たな展示手法に対する戸惑いというよりも，先住インディアンの立場に対するアメリカ社会の無理解を改めて浮き彫りにしたというべきなのである。

NMAI の当初の常設展示は，問題の所在を明らかにすることには確実に貢献

した。しかし，同時にそれは，この展示方法にNMAIが安住することにも警鐘を鳴らしていた。来館者と博物館側との意識のずれを埋めるためのさらなる工夫の必要性こそ，開館直後からの論争の重要な教訓である。その意味からすれば，開館から10年を経過して，NMAIが開館当初の常設展を終了し，新たな展示に踏み出したという経緯自体は，健全というべきだろう。問題は，新たな展示が来館者と博物館側との温度差を解消することに資するのかどうかである。そこで次に，当初の常設展には何が欠けていたのかを改めて整理した上で，実際に新たな展示をどのように評価できるのかへと議論を進めたい。

5　刷新される常設展示

NMAIが導入した当初の展示方法は，従来のアメリカの博物館における先住民展示に対して先住インディアン側が突きつけたアンチテーゼであった。しかし，同時にそれは来館者と博物館側の意識の違いをも浮き彫りにし，それを解消していく新たな工夫も必要なことを明らかにした。また，そもそもNMAIは当初から制約や矛盾を抱えていたが，開館当初の常設展にはそれらと真正面から向き合った形跡は必ずしも見られず，制約と矛盾を自覚しつつ自らの存在意義を規定していくような努力がNMAIには求められているといえる。こうした課題にNMAIが答えるためには，いくつかの検討すべき点がある。

まず，NMAIが先住インディアンの「現在」を伝えることに強い使命感を抱いてきた点について，さらなる検討が必要である。確かに，過去の人々であるかのような扱いを歴史博物館では受けてきた先住インディアンにとって，自分たちが今でも健在であるとアピールすることは，重要な意味を持っていたに違いない。しかし，現在とは過去の経緯の積み重ねの結果であることを考えれば，現在を理解してもらおうとすればするほど，過去を語ることが必要になってくる。開館当初の展示手法は，現在を強調するために，過去の比重を抑制していたきらいがあるが，この路線は，真に現在を理解してもらおうとするなら，いずれは修正を迫られるであろう。

加えて，現在を強調しようとする行為は，未来と切り離すこともできない。

「現在」は決して終着点ではないからである。先住民の現在を知らしめることに力点を置いた開館当初の展示手法で不鮮明だったのは，先住インディアンたちが自分たちの「現在」からどのような「未来」を展望しようとしているのかという点であった。苦難を乗り越えて生き残ってきた力強さを強調するだけでなく，「今後は先住インディアンはどうしたいのか」という観点に関わるメッセージを発信することこそ，本来この博物館の持つ重要な機能なはずである。そして，もし先住インディアンが望むような未来を手繰り寄せる上で障害となる事柄が現段階で存在しているとすれば，それ自体が過去の経緯の結果である以上，過去の清算なくして未来を構築することはできないだろう。だが，開館当初の常設展は，NMAI の持つこうしたポテンシャルを存分に発揮していたわけではなく，「先住インディアンはこれからどうしたいのか」という疑問に必ずしも明快な答えを与えるものでもなかった。

もっとも，どのような未来が望ましいかという答え自体が決して一つではあるまい。しかし，リザベーションという中途半端な国家内国家の地位をあてがわれ，政治的にも経済的にも伝統文化の継承においても難題を抱えている現在の状態に，先住インディアンが完全に満足しているとはとうてい思えない。先住インディアンはアメリカ社会とは一定の距離を置いた存在であり続けるべきなのか，それともアメリカ市民として将来的にはより積極的にアメリカ社会に関わるべきなのかという問題は，来館者にとって根本的な疑問であると同時に，先住民自身にとってもなかなか答えの出ない問いかもしれないが，長い目で見た時，NMAI という施設が有している恐らく最も重要な機能の一つは，先住民の未来を考えるきっかけをアメリカ社会一般と先住民の双方に提供することであるに違いない。

したがって，NMAI には，当初の常設展のコンセプトに満足することなく，まだまだ挑戦すべき課題が残っているというべきだろう。それらは，現在のよりよい理解につながるような過去を知るための有効な観点の導入と，どのような未来のためにいかなる過去を清算していくべきなのかを提示できるような視点の確保，そして，先住民の未来をともに考えることを通じて来館者と先住民との溝を解消していくことである。果たして，常設展に代わる新たな展示は，

これらの要素を十分取り込むことができているのだろうか。

開館当初の三つの常設展の内，最初に終了したのは“Our Lives”で，2014年1月，次に終了したのは“Our Peoples”で，2015年6月のことであった。“Our Universe”も，2019年4月で終了することになっている。これらの代わりに導入される新たな展示の第一弾が，“Nation to Nation: Treaties Between the United States and American Indian Nations”（以下，NTNと表記）で，2014年9月から2018年秋までの予定で公開されている。第二弾は“The Great Inka Road: Engineering an Empire”（以下，GIRと表記）で，2015年6月から2018年4月まで公開となっている。これらは，開館当初の常設展示の約10年という期間に比べれば三年程度とかなり展示期間が短縮されているが，一般に数か月単位で切り替わる特別展に比べれば相当長い期間にわたって継続される予定であり，当初の常設展に代わる新たな主力展示と位置づけられているのは明らかである。

NTNもGIRも，いくつかの点で開館当初の常設展の路線とは大きく異なる。まず，これらの展示では，コミュニティ・キュレイターのシステムは採用されず，タイトルからも“our”という言葉が消えている。パネルの解説も一人称による主観的な記述ではなく，先住民の生の声を主体的に回復するというコンセプトは抑制されている。また，先住民の現在の活力を“survivance”というナラティヴ・テーマの下に提示するという姿勢も，ここでは前面に出てはいない。NTNでは現代の部分が多少関わってはいるが，展示の中心はあくまでも過去の出来事に置かれている。また，展示対象も，当初の常設展のような「人々」というよりかは，いずれも「国家」の方にシフトしている。そして，NTNでは，これらの条約が先住民の政治的共同体と連邦政府とが交わした約束であるがゆえに，アメリカ国民一人ひとりにとって決して無関係ではないという観点が打ち出されている。その意味では，特にNTNの場合，先住インディアンの問題をもっと身近なアメリカの問題として人々に再認識してもらおうとする姿勢がより強く打ち出されているといえる。

だが，こうした相違点にもかかわらず，開館時の常設展の精神を引き継いでいる部分もある。例えば，両方の展示とも，現在の国境が確定する以前の世界

の遺産を扱うとともに，アメリカ合衆国内に限定されない，南北アメリカ大陸全体を視野に入れている。この点は，先住民の世界を理解するためには来館者を現在の国境線によって切り取られた近代国家という枠組みとは異なる認識枠へと誘導すべきだという，開館当初の考え方が明らかに引き継がれているといえる。

したがって，常設展からの切り替えが，NMAI のどのような変化を物語っているのかを検討するためには，実際の展示内容をさらに分析する必要がある。ここでは，2015 年 3 月の筆者の調査に基づいて，NTN の展示を考えてみたい[10)]。

NTN では，古くは 1682 年の Lenape Treaty から 1990 年の Native American Graves Protection and Repatriation Act のような現代の連邦法に至るまでが紹介されているが，パネル展示の中心となっているのは，Muskogee Treaty（1790），Treaty of Canandaigua（1794），California Unratified Treaties（1851），Horse Creek Treaty（1851），Navajo Treaty（1868）などである。各条約の説明部分は，“Land”，“Negotiations”，“Treaty”，“Aftermath”の四つのセクションに分けられ，条約の背景から交渉の経緯，条約の内容と後世への影響などが包括的に紹介されている。各条約の内容は異なるものの，展示全体からは，一貫して強調されているいくつかのテーマを読み取ることができる。

NTN が中心的に扱っているのは，そもそも合衆国と先住インディアンは互いに緊張を和らげようと条約を締結したにもかかわらず，合衆国の領土的野心が高まるにつれ，テリトリーを放棄せざるを得ないような圧力が先住民に対してかけられるようになると，両者の関係が対等な関係から従属関係へと変質していったという経緯である。それゆえ，一連の条約は，締結時期によって両者の力関係を反映しているだけでなく，条約に記載された先住民の権利すらもが公然と無視される事態をしばしば招いた。Muskogee Treaty（1790）の事例に顕著なように，条約締結後に起こった先住民と合衆国との間の軍事的衝突によって，条約で保証された土地の権利が消滅してしまったことも少なくない。条約の締結は，必ずしも先住民のテリトリーの保全にはつながらなかった。「友好条約」が「果たされなかった約束」へと形骸化していった歴史こそ，この展示

の基本的な準拠枠といえる。

次にNTNでは，条約に対する合衆国側の不誠実な対応が，交渉の過程ですでにみられたことを強調している。California Unratified Treaties（1851）の部分では，連邦政府の担当者によるカリフォルニアの諸部族との交渉が正当な手続きを経ていなかったばかりか，カリフォルニア州側からの抵抗もあり，連邦議会上院によって交渉内容そのものが隠蔽され，条約が批准されないまま曖昧な取り決めが合衆国側によって都合よく先住民に押しつけられてきたことが紹介されている。この事例はかなり極端なケースではあるが，正式に批准された条約の交渉過程においても，誤解や口約束などが重なり，先住民の権利が軽視されてきたことが紹介されており，そうした経緯からすれば，このような事態が生じたとしても決して不思議ではないことが理解できるようになっている。

さらにNTNでは，先住民の権利を確実に保証することへの合衆国側の無関心ゆえにこれらの条約が形骸化していったことの結果として，その後，条約で本来認められているはずの先住民の権利が，今度は州によって侵害され，先住インディアンと連邦と州という三つ巴の複雑な対立が生まれてきたことも紹介されている。例えば，北西部太平洋岸の諸部族は，連邦政府との交渉の過程で，領土面で譲歩する代わりに永久漁労権を獲得する道を選んだが，その後ワシントン州が環境保護の観点から州内の動物の捕獲を規制するようになり，先住インディアンたちは，連邦と自分たちが交わした条約の有効性を認めさせるべく，いわゆる“fish-in”の抗議活動を行い，最終的に1979年に連邦最高裁判所はその条約の有効性を認める判決を下した。この法廷闘争は，連邦が批准した条約が州による侵害を受けるという構図であったことから，連邦が州を訴える事態を招き，先住インディアンと州と連邦をめぐる複雑な関係が改めて露呈した。州の内政に関わる部分は本来は州に権限があるものの，連邦政府が先住インディアンとの間で州の頭越しに一種の外交条約を結んできた歴史が，この国の統治のあり方そのものに亀裂を生じさせているのである。

しかし，こうした事例が示しているのは，アメリカの国家体制の欠陥ばかりではない。条約の締結の過程や内容がどうあれ，結果的に侵害された先住民の権利を回復するための自浄作用が，この国には全くないわけではないことも

が，ここでは暗示されているからである。こうして NTN の展示は，先住インディアンと連邦政府とが交わした条約が，様々な不備を抱えており，それが先住民とアメリカという国家の両方に混乱をもたらしていることを強調しつつも，未来に全く希望がないわけではないことをも示唆している。

このように，NTN の展示は，先住インディアンの立場の表明に終始するというよりは，これらの条約をめぐる一連の歴史的経緯をより包括的に捉え，先住民を取り巻く問題を未解決の国家の問題として来館者に再認識させようとするコンセプトが強い。これは，現在のよりよい理解につながるような過去を知るための有効な視点の導入，未来を切り開くために必要な過去の清算，先住民の未来を考えるきっかけを先住民とアメリカ国民一般の双方に提供することといった，先に筆者が指摘した NMAI が目指すべき方向性と親和性が高いといえる。一方，この展示は，現在のバウンダリーを所与のものとみなすのではなく，過去におけるその決定過程そのものを問題化していくことで，現在の国境線を前提とした近代国家という準拠枠そのものを宙吊りにしようとする，開館当初の精神をも引き継いでいる。その意味で NTN には，開館当初の精神を完全に放棄することなく，開館当初の常設展では必ずしも達成できなかった目標に接近しようとする NMAI の意図が感じられる。その上，連邦政府から財政援助を受けているスミソニアン協会の博物館群に属していながら，連邦政府にとっては耳の痛いトピックに切り込んだという点でも，NTN の展示は，NMAI の立場的制約を乗り越える画期的な前進といえる。

また，パブリック・メモリーの動向に照らしても，NTN が体現している傾向は意義深い。知られざる過去の発掘やマイノリティ側の記憶の復権といった要素は，マイノリティを周縁に追いやってきた「公式の歴史」にマイノリティ側が対抗していく際に必ず登場してくるものだが，それを公共の共有財産として定着させていくためには，一般国民を「記憶の当事者化」していく工夫が必要である。その点，NTN の場合，マイノリティの言い分の単なる表明や被害者意識に凝り固まった過去の告発という次元に終始することなく，来館者一般に当事者意識を持ってもらおうとする姿勢が強く打ち出されている。マージナルな記憶の公共化・共有化の手法としては，例えばワシントンのホロコース

ト・メモリアルが採用しているような，無名の人々の中の誰かに自分が感情移入したり，その人の経験を追体験するやり方がよく知られている。それに対しNTNの場合は，先住インディアンにとっては忘れられない存在であっても，一般のアメリカ人にはすっかり忘れられているような過去の条約が，法的には失効したとは必ずしもいえない存在であるがゆえに現代のアメリカ国民にとっても決して無関係ではないという観点を強調することで，マイノリティ側が提示する記憶を国民全体が背負うべき課題へと一気に変換しようとする。それは，感情移入というよりは理知的なアプローチであり，マイノリティ側が提示する埋もれた過去にアメリカ国民として向き合わざるを得ないような，いわば逃げ道を封印することで記憶の共有財産化を成し遂げようとする手法といえる。その意味でNTNの展示手法は，マイノリティ側がパブリック・メモリーに働きかけようとする際の「記憶の当事者化」のもう一つのモデルとなり得るといえる。

しかし，NTNは，どのような解決や未来が望ましいのか，確定的な答えを用意しているわけではない。この展示は，対等な関係が従属関係へと置き換えられることでなし崩しにされていった先住民の民族自決の回復の重要性を示唆しつつも，あくまでそれは先住民の部族ごとの「国家」という政治単位によって実現されるべきものなのか，そして仮にそうなら先住インディアンの政治的共同体と連邦政府との関係はあくまでも国家間関係であるべきなのかといった点に関して，今一つ不鮮明である。つまり，先住民社会の未来像にまで必ずしも十分には踏み込んでいないのである。

確かに，連邦政府と先住インディアン諸部族との条約は，当初は連邦政府の力が弱かったこともあり，余計な衝突を回避しつつ白人側の領土的野心を満たすため，友好条約的色彩があった。そこでは，先住インディアンの政治的共同体を国家になぞらえて扱い，その独立性を認め，互いに干渉せずに平和を保つことが想定されていた。実際，アメリカ側は，条約を結んだ先住民国家にピース・メダルと呼ばれる平和の印を贈呈していた。しかし，条約で決められたテリトリーに白人側が満足できなくなると，当初の取り決めは無視されるか，白人側に都合よくねじ曲げられ，先住インディアンはリザベーションへと強制移

住させられていった。つまり，白人側が先住インディアンの暮らしに干渉し，コントロールするようになったのである。19 世紀後半の同化政策も，その延長上にあるといえる。

ところが，こうした先住インディアンへの連邦政府の干渉は，1934 年のインディアン再組織法やその後のいわゆる“Termination”によって新たな局面を迎えた。この背景には，リザベーションの貧困や荒廃の度合いが進んでいた一方で，連邦政府にとって先住インディアンの統治が人的にも財政的にも重荷になってきたため，一定の権限委譲によってリザベーションの活性化と連邦政府の負担軽減の両方を実現しようとする意図があったといえる。これは，連邦政府による干渉の度合いが軽減したという点では先住インディアンの自治の度合いを強める契機となるものだったが，長期にわたって同化政策や政治的干渉を受けてきた先住民の共同体にとっては，必ずしも手放しで喜べるものでもなかった。経済力のないリザベーションにとっては，連邦政府からの支援なしに自立することは不可能であったし，かといって部族の伝統に立ち返ろうにも，同化政策によってその継承が困難となっていたからである。それに，そもそも民族自決の基盤となるテリトリーとしてのリザベーション自体が，かつての先祖たちのテリトリーとは必ずしも一致しない，連邦政府によって指定された区域なのである。

連邦政府と先住インディアンとが交わした当初の条約に対する関心が浮上してきたのは，このようないわば根無し草的な状態に放り出されてしまった先住民たちが，自分たちと連邦政府との関係を再規定していくための土台を新たに求めていたことが関係している。当初の条約が体現していたような対等な友好関係こそ，先住民の政治的共同体の独立性と合衆国との共存を可能にするための原点として再認識されるべきだという発想がそこにはある。NTN の展示でも，条約締結の際に贈り物にされたワンパムという先住民の織物が展示されているが，ワンパムの図柄に織り込まれた二本の平行な線は，先住民と合衆国が別々の道を歩みつつも，決して互いを滅ぼさず共存していくという意味が込められていた。こうした条約への関心の根底に存在するのは，民族自決と共存という原点へと両者の関係をリセットしたいという希求なのである。

しかしながら，民族自決と共存を両立させるための政治制度として，現在のリザベーションのシステムのままでよいのかは，この展示からは判然としない。当初の条約の精神に立ち返るなら，先住民の政治的独立性の主張やそれを反故にしてきた合衆国側の政治的責任に対しては，来館者の側からも一定程度理解が得られるであろうが，仮に先住民が民族自決を望むのなら，政治的に合衆国とは距離を置こうとしている共同体を連邦政府がなぜ管轄し支援しなくてはならないのか，それは先住民だけをマイノリティの中で特別扱いしていることにならないかという疑問が残ることが考えられる。また，仮に先住民の共同体が完全な独立国として存立できるような経済的・社会的基盤を欠いているとすれば，彼らのいう民族自決とは実際には不完全なものであり，そのような不完全な「国家」としてのリザベーションがアメリカという国家の中に 200 以上存在するという状態が健全といえるのかどうかについても，この展示は正面から答えているわけではない。

このように，NTN の展示は，NMAI の新たな挑戦としても，パブリック・メモリーの動向に照らしても，少なからぬ意義を有しているとはいえ，今後追求すべき課題が残されていることも同時にそこからは読み取れる。しかし，少なくともこの展示は，先住民をめぐる忘れられた記憶をアメリカの国家体制の不備という観点から国民的課題として捉え直す必要があることを来館者に再認識させることには成功しているといえるだろう。現在のリザベーションは，条約が果たされぬ約束へと甘んじることになった過去の負の遺産を体現する存在である。実際にはリザベーションは，多くの先住民の生活基盤であり続けているとはいえ，民族自決と共存という目標にとって最も適したシステムとはいいがたい。現在の制度では，先住インディアンの国家は，独立国とはいえず，国家内自治区のような地位にある一方，どこの州にも属さず，連邦議会にも代表を送れないなど，アメリカという国家の一部ともいえないような中途半端な立場にある。リザベーションという制度そのものの是非も含めて，先住インディアンの共同体をアメリカはどう遇するべきなのか，他方，先住インディアンはアメリカという国家にどう関わっていくのかという問題こそ，NTN の展示の先に横たわっている将来の課題なのであり，それこそ NMAI という機関がい

ずれは向かい合わなければならない，避けて通れない論点なのである。

6　記憶の復権から記憶喪失の解消へ

小論では，NMAI の設立の経緯と開館当初の常設展のコンセプトを踏まえた上で，刷新された新たな展示としての NTN の持つ意味を分析し，NMAI がどのような方向へと歩んできているのかを考察してきた。当初 NMAI は，先住インディアンの主体の回復という重要課題に取り組むために，それを最優先する戦略をとらざるを得なかった。しかし，開館から 10 年以上を経て新たにスタートした NTN の展示からは，この博物館が先住民とアメリカ国民一般の双方にとってどのような潜在力を秘めているのかをさらに掘り起こそうとする姿勢が感じられる。そこにはまだ先住民社会の未来像を提示しきれていないという不十分さは残るものの，NMAI が立場的制約を乗り越え，その潜在的機能を存分に発揮し得るような将来に向かって確実に近づいている形跡がうかがえる。加えて，NTN の展示は，「記憶の当事者化」のもう一つのモデルを鮮明に打ち出すことで，マイノリティ側がパブリック・メモリーに働きかける際の手法の幅を広げることにも成功しており，今後これがどのような広がりを見せるのかも注目される。

とはいえ，同時に NTN は，この博物館を先住民と国民一般の両方にとって意義のあるものとするためには，将来的には NMAI がリザベーションの未来を本格的に問題化するような展示にさらに踏み込む必要があることをも暗示している。ただ，政治的にいっそうデリケートな問題を含むだけに，そうした展示を成功させるためには，いくつかまだ工夫の余地があるだろう。そうした将来への準備として NMAI にはまだ何ができるのか，最後にこの博物館の射程を少し別の角度から考えてみたい。

NMAI は，第三者的な観察の対象に甘んじてきた先住民に，自らの声で語る機会を提供し，過去ではなく現代の姿を知らしめようと出発したのだったが，そこにはこの博物館が抱え込んだ根源的自己矛盾も同居していた。それは，先住民の記憶と表象に関するこうした新基軸が，ハイという白人の収集家のコレ

クションに依拠しているという点であった。つまり，この博物館は，先住民の語りの主権を，半ば略奪された「モノ」が引き立てるという奇妙な構造を不可避にはらみつつ誕生したのである。こうした自己矛盾は，先住民による自己表象自体が白人の恩恵にあずからなければならないという皮肉を体現しているわけだが，こうしたNMAIの自己矛盾は，先住民と白人との間の相互依存性の上に現代の先住民が存在していることを改めて浮き彫りにするとともに，実は民族自決を唱えることの限界をも暗示している。先住民の世界は，もはや純粋な伝統文化の世界ではなく，外部との相互依存性なくして成り立たないのである。とすれば，むしろこの自己矛盾こそを新たな出発点に代えるような発想の転換が，NMAIには必要ではないだろうか。

実際，こうした発想の転換は，記憶を特定の集団の所有物とみなすような発想そのものの超越を可能にする。NMAIでは，記憶や表象の主権を先住民が取り戻したかのように見えて，それは文明社会から注がれた他者への眼差しを通して集められた「モノ」に依存していた。自らの記憶と表象の権利を回復したかに見えた瞬間に姿を現す，こうした先住民と白人との間の隠れた相互依存関係は，記憶や表象の所有権の持つ限界を暴露しつつ，アメリカが今後向き合うべきもう一つの過去の存在を暗示している。それは，個々の集団が自らの記憶を復権した時に改めて浮上してくるような集団間の意外なつながりであり，まさに集団の間にあるがゆえに誰かが独占的な所有権を主張できないような過去に対する国民全体の記憶喪失状態である。NMAIが自己矛盾と真正面から向き合うことで最終的に救済できるのは，実はこの種の忘れられた相互依存関係や社会的記憶喪失なのである。

こうした観点を意識した先住民研究は，実際には既に行われている。ジャック・M・ウェザーフォードの *Indian Givers*（1988）や，ドナルド・A・グリンデ・ジュニアとブルース・E・ジョハンセンによる *Exemplar of Liberty: Native America and the Evolution of Democracy*（1991）などはその好例だろう[11)]。先住民の農業や食糧に関する知識をはじめ，政治社会組織の伝統までもが，いかに意外な形でアメリカ社会に吸収されているのかという，これらの研究が示唆している観点は，自己の記憶の復権という枠組みでは捉えきれない，集団間にあって

忘却されている過去の密接な影響関係を浮き彫りにしている。特に後者は，独立革命期の植民地人の目に先住民社会がヨーロッパの絶対王政とは異なる民主的社会に映り，アメリカという国のアイデンティティがヨーロッパ的なるものと先住民の伝統の融合というべきプロセスを経て形成されていることを示唆しているが，そうした過去の記憶は現代アメリカ社会では失われているといわざるを得ない。アメリカの歩みが集団間の境界をまたぐ形で構築されたにもかかわらず，まさにそうであるがゆえに逆に誰の記憶からも忘れられてしまったのだとすれば，アメリカ社会は，自らのルーツを見失わないためにも，そうした記憶を忘却から救い出さなければならないだろう。そして，それは，人々の雑種的成り立ちに改めて目を向けさせ，境界線で囲まれた世界の虚構性を改めて浮上させる。そこには，記憶の絶対化の罠を回避しながら，記憶をめぐる対話と相対化のプロセスへと人々を誘導する契機が潜んでいる。

しかも，こうした方向性からの先住民研究は，昨今のアメリカ研究の新たな潮流のひとつである，いわゆる「ポストナショナリスト・アメリカン・スタディーズ」とも親和性を持っている。ジョン・カーロス・ロウやトマス・ベンダーらが提唱するこの新たな研究スタイルは，国の歩みを国境線の中の閉じた歴史として捉えるのではなく，それが国境の外の世界との関わりの中で構築されてきた点を重視し，既存のアメリカ史をむしろ相対化しようとするものである[12)]。それは，アメリカ研究が南北アメリカ大陸研究，太平洋世界研究，大西洋世界研究等と接点を構築していく方向性を持つとともに，国境で切り取られた歴史という枠組みからこぼれ落ちたがゆえに忘却されてきた過去のトランス・リージョナルな営みを描き出そうとしてきた。

ここで興味深いのは，NMAI は，境界線の人為性や歴史の相対化という，ポストナショナリスト的な視点に通ずる展示を実際にはすでに行っているという点である。当初の常設展で紹介されていた先住民のコミュニティは，決して合衆国だけに限られていなかった。もっとも，これはハイのコレクション自体が国境横断的だったこともあろうが，結果的にこうした展示方法は，先住民の人々にとって現在の国境は勝手に引かれた人為的なものにすぎず，つい数百年前までは国境という境界線で切り取られた世界はこの大陸には存在しなかった

ことを改めて強烈に印象づける。また，“Our Peoples”の展示に，“Giving Voice to Our Histories”と歴史が複数形で使われていた点にも明らかなように，NMAI は，コミュニティごとの個別の歴史を提示することで白人側の単一でリニアーな歴史観を相対化しようとする発想を備えていた。

NMAI もポストナショナリストたちも，境界線を問題化し，歴史を相対化することで，各国史という枠組みの限界を超えようとしている。これは，公共空間における記憶表現を担う社会的実践の場としての博物館の姿勢と，そのあり方に対する指針を提供すべきアカデミズムの側の問題意識とが共鳴している様子を表している。と同時に，国家の境界線や歴史のカテゴリーを越境しようとする姿勢は，いくつかの先住民研究が示唆しているような，先住民と白人とをめぐる集団間の相互影響関係の忘れられた記憶を手繰り寄せようとする発想とも親和性を有している。このように考えてみると，NMAI は，先住民の記憶の復権から相互依存性をめぐる集団間の記憶喪失の解消へと，その存在意義を高めていける潜在的な可能性を実は当初から有しているともいえるのである。

現に NMAI は，パネル中心の小規模な巡回展示においてはこうした方向性に沿った展示をすでに企画している。2009 年から全米各地の博物館を巡回している“Indivisible: African-Native American Lives in the Americas”は，先住インディアンとアフリカ系アメリカ人が社会的・文化的にどのように交わってきたのかを多角的に取り上げているし，2012 年から巡回中の“Ramp It Up: Skateboard Culture in Native America”は，スケートボードという先住民の伝統文化とは異なるスポーツがリザベーションで現代の先住民文化の一部を作り上げていることを紹介している。両者とも当初は 2014 年までの巡回予定であったが，2015 年以降も延長されている。これらの展示の成功は，NMAI の企画力の高さを示すとともに，先住民と外部との意外なつながりを掘り起し，アメリカの雑種的成り立ちについて再認識させてくれるような視点が，人々の関心を集めていることを暗示している。

先住民側の記憶の復権だけでは，アメリカという国の雑種的な生成過程や境界線を越えた相互影響関係にまつわる失われた記憶を十分呼び起こせるとは限らない。しかし，NMAI が，自身が抱える自己矛盾が集団間の相互依存の帰結

であり，そもそもこの国が先住民とアメリカ国民の相互依存関係の上に存立していることを再認識する時，NMAI という装置は，集団間の埋もれた記憶をめぐる記憶喪失状態にメスを入れるという，パブリック・メモリーの再構築の新たな段階を切り開く先導役を担うことができるだろう。そして，マイノリティの記憶の復権から集団間の記憶喪失の解消へと前進できるならば，集団間の相互依存関係がこの国を支えてきたという埋もれた記憶が姿を現し，それはリザベーションのような先住民問題に対する国民一般の当事者意識の定着にも貢献するはずである。同時にそれは，非 WASP 多数派時代へと突入しつつあるアメリカ社会において，多様な集団が一緒に暮らすことの持つ意味を再確認するための大きな礎ともなるに違いない。

このように NMAI は，長期的には先住民の記憶の復権に終始することなく社会全体の記憶喪失を解消するという役割を自覚的に担っていくことが，その潜在的可能性を開花させることにつながるといえよう。記憶の復権から記憶の共有へという流れを強化するためには，社会全体の記憶喪失状態を改善していく必要がある。それは，時として既存の歴史観を大きく揺さぶり，自国の恥部と改めてアメリカ国民が向き合わなければならないような状況をも作り出すだろう。とはいえ，集団的記憶喪失からの脱却は，自民族中心主義や偏狭な愛国主義を乗り越え，むしろ諸集団の相互関係性に立脚した歴史認識・自己認識を可能にする点で，きたるべき人口構成の変化した時代に相応しい国民的価値観の再構築にも役立つものである。NMAI の未来は，現代アメリカにおけるパブリック・メモリーの再構築がアイデンティティ・ポリティクスの渦の中からどのように成長していけるのかを占う一つのバロメーターなのである。

注

1）　筆者の下記の論考を参照されたい。鈴木透「生まれ変わる古戦場――カスター神話の解体と先住インディアンの記憶の復権」,「デモクラシー，暴力，イノセンス――テロの時代における記憶の民主化と愛国主義」近藤光雄他編『記憶を紡ぐアメリカ――分裂の危機を超えて』慶應義塾大学出版会，2005 年，p.87−130, 281−321。鈴木透「危機の記憶とフォークアートの変容――エイズ・メモリアル・キル

トの文化史」『教養論叢』134 号（2013 年），p.1−16。鈴木透「ボストンマラソンテロ事件をめぐる顕彰行為――パブリック・メモリー，SNS，スポーツ・イベント」『教養論叢』136 号（2015 年），p.65−86。

2）　日系アメリカ人の強制収所跡地の史跡保存に関して連邦議会は，カリフォルニア州のマンザナールを Manzanar National Historic Site とすることを 1992 年に決定し，2004 年には国立公園局が管理する博物館も開館した。ほかにアイダホ州の収容所についても，国立公園局の管轄の下で Minidoka National Historic Site として整備が行われている。また，公民権運動関連の史跡としては，公立学校での人種隔離を違憲と認定した 1954 年の最高裁判決であるブラウン対教育委員会判決の舞台となった，カンザス州，トピーカの人種隔離の行われていた公立小学校の建物が，Brown vs Board of Education National Historic Site として 1992 年に連邦議会によって国立公園局傘下の国定史跡に指定されている。

3）　例えば，第二次世界大戦中のいわゆるホームフロントにおいて，戦争遂行に必要な生産体制の維持に尽力した女性たちの役割を再評価する観点から，カリフォルニア州，リッチモンドの造船所とその周辺地域が Rosie the Riveter World War II Home Front National Historical Park として 2000 年に国立公園局管轄下の史跡になっている。

4）　NMAI の設立の交渉過程でのスミソニアン協会側の反応については，Patricia Pierce Erikson, “Decolonizing the ‘Nation’s Attic’ ”: The National Museum of the American Indian and the Politics of Knowledge-Making in a National Space,” Amy Lonetree and Amanda J. Cobb, eds., *The National Museum of The American Indian: Critical Conversations*（Lincoln: University of Nebraska Press, 2008）, p.43−83 を参照した。

5）　NMAI の建物や空間設計など建築的側面に関しては，Duane Blue Spruce ed., *Spirit of a Native Place: Building the National Museum of the American Indian*（Washington, D.C.: Smithsonian Institution, 2004）を参照されたい。

6）　“Review Roundtable: The National Museum of the American Indian,” *Public Historian* 28: 2（2006）, p.47−90 及び Amy Lonetree and Amanda J. Cobb, eds., *The National Museum of the American Indian: Critical Conversations*（Lincoln: University of Nebraska Press, 2008）を参照した。

7）　Amy Lonetree, “Continuing Dialogues: Evolving Views of the National Museum of The American Indian,” *Public Historian* 28: 2（2006）, p.57−61.

8）　Douglas E. Evelyn and Mark G. Hirsch, “At the Threshold: A Response to Comments on the National Museum of the American Indian’s Inaugural Exhibitions,” *Public Historian* 28: 2（2006）, p.85−90.

9）　Laura Peers, “ ‘Playing Ourselves’: First Nations and Native American Interpreters at Living History Sites,” *Public Historian* 21: 4（1999）, p.39−59.

10）　この展示に合わせて，Suzan Shown Harjo, ed., *Nation to Nation: Treaties Between the United States and American Indian Nations*（Washington D.C.: Smithsonian Institution, 2014）という関連書籍が出版されているが，書籍の内容は必ずしも展示内容と同一ではない。小論での議論は，あくまでも展示内容を基にしている。

11）　Donald A. Grinde Jr. and Bruce E. Johansen, *Exemplar of Liberty: Native America and the Evolution of Democracy*（Berkeley: University of California Press, 1991）及び Jack. M. Weatherford, *Indian Givers. How the Indians of the Americas Transformed the World*（New York: Ballantine Books, 1988）を参照されたい。

12）　Thomas Bender ed., *Rethinking American History in a Global Age*（Berkeley: University of California Press, 2002）及び John Carlos Rowe ed., *Post-Nationalist American Studies*（Berkeley: University of California Press, 2000）を参照されたい。

付記

小論は，アメリカ学会第 41 回年次大会アメリカ先住民分科会（2007 年 6 月 10 日，於立教大学）における「National Museum of the American Indian における記憶と表象」と題した口頭発表の原稿を基に，その後の動向を念頭において大幅に加筆改稿したものである。発表の機会を与えてくださった立教大学の阿部珠理先生にこの場を借りて御礼申し上げたい。